

考えよう 情報社会の光と影

技術の発達によって、以前では考えられないほど情報の発信や収集が容易になってきた。その利便性に、私たちは様々な場面で恩恵を受けている。

インターネットなどの情報手段が個人や社会に及ぼす影響を十分に理解し、正しい判断ができるよう、情報社会を生きる一員としての自覚を育てていこう。

離れていても 伝えられる

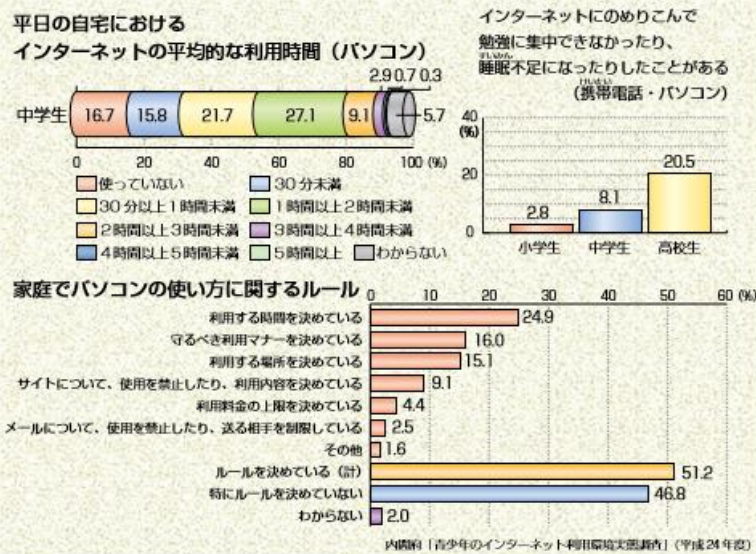
電子メールなどのやりとりによって、普段は会えない遠く離れている人と交流ができたり、悩みを相談したり、言いそびれた「ありがとう」を伝えたりすることができる。



電子メールなどを使う際には、互いの顔が見えなくても相手の状況や気持ちを考え、伝える内容にも十分に気を配ってやりとりできるようにしよう。

情報化が及ぼす問題

インターネット上には、正しい情報だけではなく、間違った情報や、悪意のある情報も数多くある。また、節度のある使い方をしないと、健康までも害してしまうことがある。



- 考えられる問題
- インターネット上の情報を丸ごと信じてしまう
 - 現実と仮想世界の区別がつかなくなる
 - 生活習慣の乱れ
 - 自分の意志でやめられなくなる「ネット依存」
 - 心身の健康への影響 など

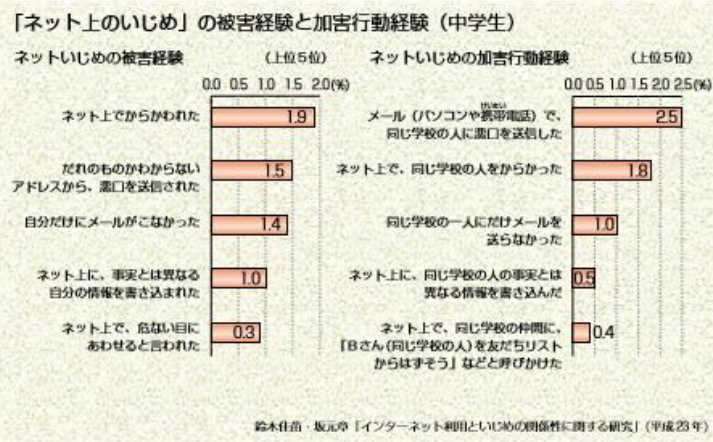


生活習慣を崩さないよう、家族とも話し合っ節度のある利用法を考えよう。また、インターネット上の情報にアクセスしたり、情報をやりとりしたりする際、正しい情報か、自分が責任をもてるか、誰かに迷惑をかけないか、クリックする前に、よく考えて、判断しよう。

情報技術を利用した「いじめ」

陰湿で卑怯な行為である「いじめ」が、インターネットを介することでさらにその卑劣さを増していく。

相手の顔が見えないために、いじめの悪質さは一層エスカレートしていく傾向にあると言われる。



電子メールやインターネット上の掲示板等を利用して、特定の生徒に対する誹謗や中傷が行われる「ネット上のいじめ」は、他のいじめと同様に決して許されるものではない。私たちの周りで、このようなことが起こらないようにするためにはどのようにすればよいか、考えていこう。

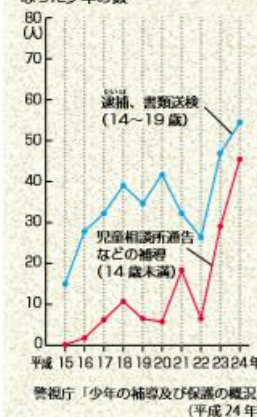
情報技術の発達に伴い、インターネット上での誹謗や中傷、あるいはメールを介したいじめやいやがらせが増えている。メールやSNS（ソーシャルネットワークサービス）を意図的に悪意あるコミュニケーションに利用する人もいる。情報社会の中で、あふれる情報に対し、適切に判断し、行動し、自分と相手を守るために必要なことを考えてみよう。

「分身キャラが欲しかった」SNSで女子中学生が他人のアカウント乗っ取る

××新聞〇月△日

インターネットの会員制交流サイト（SNS）で他人のアカウントを乗っ取ったとして、〇〇県警サイバー犯罪対策課は県内の中学1年生の女子生徒を児童相談所へ通告した。同課によると女子生徒は5月、SNSのサイトで知り合った男子中学生に「コイン（仮想通貨）をあげる」と言ってIDとパスワードを聞き出し、無断でアクセスしてコインを自分のアカウントに移し盗み取っていた。パスワードを変更し男子生徒がアクセスできないようにしていたという。

不正アクセス事件で加害者になった少年の数



ネット社会では、誰もが容易に加害者にも被害者にもなり得る。著作権や個人情報の保護、不正アクセスの禁止など法やきまりを守って適正な使い方をしよう。

情報社会を生きる一人として
絶対にしてはいけないうと

(3) 励まし合い高め合える生涯の友を

友人との関係は、楽しく、頼もしい。

一方で、私たちはしばしば、その関係につまづいたり、気まづくなったりする。

「友情は成長の遅い植物である。」

というのは初代米国大統領ジョージ・ワシントンの言葉だ。

そして、友情という名に値するようになるためには、幾度かの困難な打撃に耐えなければならない、と続く。

表面的な仲間関係にしがみついたり

無批判に相手に同調したり、

自分が傷つくことを恐れて心を開かない関係からは、

真の友情は生まれないだろう。

心から信頼できる友を得るために、

私たちはどうあるべきなのだろうか。



あなたにとって友達とは？

楽しいばかりでなく

周りのことを考えられる人

(中三・男子)

お互いに

思いやっけていける人 (中二・女子)

良きライバルでもあり

相談相手でもあり、信頼できる人

(中三・女子)

けんかもするけれど

何でも話せる人 (中一・男子)

宝物

友達がいなかったらすごく寂しい

(中一・女子)

● あなたにとって友達とはどんな存在か、考えてみよう。

● 友達のために何ができるか、考えてみよう。

見付けよう、友達の良さを

あなたのすぐ近くにいる
彼や彼女。
友達の「良さ」を
見つけてみよう。



誰もが
その人にしかない「良さ」を
もっている。

● 友達の良い所を書いてみよう。

● 家族や人生の先輩にそれぞれの考える友情について話を聞いてみよう。

正岡子規と夏目漱石

俳人として、また俳句や短歌の研究者として大きな業績を残した正岡子規と、我が国を代表する小説家・夏目漱石は、大学時代からの親友でした。二人が親しくなるきっかけは、共に好きな寄席の話題でした。漱石が英語教師として松山に赴任した際には、漱石の宿舍に子規が居候し、共に俳句づくりに没頭しました。

子規と漱石は日頃からしばしば手紙のやりとりをしていました。子規は、二十一歳の頃から病気がちとなり、次第に床に伏すことも多くなります。

明治三十三（一九〇〇）年に漱石がロンドンに留学する頃には、子規の病状はかなり悪くなっていました。留学した漱石は、病氣の子規を慰めるため、ロンドンの人々の様子や下宿先での生活についてユーモアを交えて手紙に書き、子規に送ります。子規はそれを喜び、「倫敦消息」として雑誌「ホトトギス」に掲載しました。

明治三十四（一九〇一）年十一月、病狀の悪化に苦しむ子規は、ロンドンの漱石に手紙を書きます。僕はもう駄目になってしまった、毎日涙もなく号泣している、とつづり、ただ漱石がくれた手紙は非常に面白かった、君の手紙を見て西洋に行ったような気になって愉快でたまらない、もし書けるなら自分の目があるうちに今一便くれないか、と頼みました。しかし、自らも体調を悪化させていた漱石は、更なる手紙を書くことができませんでした。

子規は、漱石の帰国を待たず、明治三十五（一九〇二）年に三十四歳で亡くなります。漱石の胸には深い悔恨が残ったことでしょう。漱石は、後に自らの出世作となった「吾輩は猫である」の序文で、子規への哀悼の気持ちを述べ、この作品を亡き友にささげています。



夏目漱石



正岡子規